

HAYAKAWA LITERATURE

ラ・メカニカ

カルロ・エミリオ・ガッダ／千種 堅訳



早川書房



HAYAKAWA LITERATURE

ラ・メカニカ

カルロ・エミリオ・ガッダ
千種 堅訳

早川書房

訳者略歴 昭和5年生，昭和28年東京外国語
大学ロシア語科卒，イタリア文学者，立教大
学講師 主訳書「メルラーナ街の怖るべき混
乱」ガッダ「狂気もまた愛に渴く」トビーノ
「旅の神話」ベヴィラック（以上早川書房
刊）他多数

LA MECCANICA by Carlo Emilio Gadda
Copyright © 1970 by Aldo Garzanti Editore s.a.s.,
First published 1978 in Japan
by Hayakawa Publishing, Inc.
This book is published in Japan by direct
arrangement with Aldo Garzanti Editore.

ラ・メカニカ

カルロ・エミリオ・ガッダ ちるきょ けん 千種 堅訳

印刷 1978.4.20 発行 1978.4.30
発行者 早川 清
発行所 株式会社 早川書房 東京都千代田区神田多町2-2
電話 東京(254)1551(代)／振替 東京・6-47799／〒101
定価 1200円
印刷 誠友印刷株式会社
製本 株式会社明光社
乱丁・落丁本はお取替えいたします
0397-870130-6942

ラ・メカニカ

日本語版翻訳権独占
早川書房

© 1978 Hayakawa Publishing, Inc.

現実と必然についての学問、原因と結果についての学問、そして照準、打診、前提などの性質についての学問、その学問あればこそ初めて、彼のノートから次のようなことを読みとることができる。つまり、草原に立つ木から作者の頭上に木の実が落ち、一方、高山の孤独な塔からは深みを求めて、石が割れながら落ちるだろうということ、狙いをつけて蹴っても、とびはねながら標的を越えてしまうだろうということ、そして、生えてきた草は馬が食べて、それで大きくなるだろうということを読みとれるはずだ。だが、山々の影の前で、夜の星空の下で、血管の内側で、そして外で、森に住むおびただしい人たちのいるところで、彼らの魂の暗い事実について予言する魔力はわずかしき持ちあわ

せていない。あざむかれた聖者たちを前に祭式をいとなんだあと、最後におろかなふくろう大先生までが、その一文ぶぶんの中でまことに賢明にもおっしゃることぐらいが、せいぜい、このページの内容だと、たわむれに述べておこうか。

Est quod est. (彼あるが故に彼ありと)

I

だが、不毛の明るい平野を通して、あるいは広大なジャングルの身の毛もよだつ恐怖の中で、生者の声のひとつひとつを聞くたびに、あの世の人は、世代の濁った川が流れる符牒として聞くだろうし、森から引きむしられた小枝や茎がその岸にぶつかって音を立てているものと思うだろう。そして風船のようにふくらんだ、恐ろしい異臭を放つ、腐った動物の死骸が、笛状の四本の脚を宙に突き立て、緑色を帯びている。これらの死骸にしてもかつては生きていたので、羊、ハイエナ、血なまぐさい山犬、びょんびょん飛びはねる猿、ライオンのたて髪に、大きなひげを生やしたろばなどであったろう。そして、汚れて、ふくれあがったその群れがぬかるみの岸辺にたどり着いて、横になっているだろう。そこにはただ、死の暗

い虚栄があるだけだ。

だが、聖なる流れは、闇の不平を乗せて、遠い星へ向かい下りつづけるだろう。そして波浪の黒い柩布の上にあお向けとなり、おのが死の静謐と孤独の中にくつろいだようにして、蠟の光の産物とみえる印や肉体を通りすぎて行くだろう。ぐったり疲れ果てて全身が重くなり、いまはただ自らの青春の光輝をよそおいただけだろう。そして、頭は疲れて波浪にひたし、顔は凍てついた空に向けるだろう。こうして、その死の中に位置したところは、永遠の青白い花と映ろう。

その日、一九一五年十月五日、月曜日、折りしも藁を詰めた椅子に腰を下ろし、縫いものをしていたあでやかなゾライデは、突如、扉を叩いた嵐に頭を上げ、ふり向いた。彼女は服をたくしあげ、いいよる男たちが生唾を飲みたくなるような、刺戟的な姿勢で坐っていた。もっとも、その場には誰もいあわさなかったけれども。

いかにも意地になって、力もあるところをまざまざと見せようとはかりに、なおも扉を叩いていた。で、彼女は静かに刺繍を下に置くと、流れ落ちるみごとな髪の毛を片手にとって、頭をあお向け、身じまいを正した。金色と銅色の輝くブロードで、豊かな、ふさふさした髪の毛だった。その先端はひたいから、手首から垂れ、乱れた、たわわな残りの髪に押されて、

刺繡の上にこぼれようとしていた。

はしこく、そして静かに立ち上がった。「静かに、静かにして」と、門、鎖、留め具にスプリング・ボルトまでついた扉の後ろに立つと、静かに、と同時にきっぱりといった。扉はテラスになっている回廊に面していた。

「どなた」そのあと、すぐにつけ加えた。「警察ってことはないわね、そんなふうに叩いても」

そして、自分の落ちつき払ったところを、その何者かに見せてやろうとでもいうように、両手を腰に置き、返した手のひらを背中の方に当てがい、わんぱく坊主を前にしたように、きびしく、断固と、高いところから話しかける姿勢で、軽く前にかがみこんだ。若者たちのなかには、噛みつきたくなるような、むき出しの、白いその手に、その腕に、うつつをぬかしているものもいた。

「おれだよ、さあ、開けてくれ」と、外から男の声が聞こえた。

ゾライデは声の主が分かった。

「あら。まあ、まあ、もうちょっと上品に叩いてくれれば、開けてあげたのに……人様のドアって、あんなふうに叩くものかしら」

「ベルが鳴らなかったんだ……」

「知ってるわ。でも、ベルのないぐらい、ちゃんと分かっている、当然よ、ジルド、そうじゃなくって？……用は何なの」

「話があるんだ。聞けてくれ」そして、力強いところ、落ちついたところを見せようとしていたその声が、目には見えなくても分かるのだが、及び腰のダンディーにふさわしい愚かな、ぎごちない笑顔に消えた。

「いいわ、待っててね」

ゾライデはたんすに近づいていったが、そこには役にも立たないたくさんの品物にまじって、縫いものが山と積んであったし、いまこの瞬間、彼女にとって最も重要なもの、つまり鏡がひとつあった。解いた髪の毛に、白いアイヴォリーの、少し油で汚れた幅の広い櫛を深くと埋め、長々と引っぱると、いっそう念入りに身なりをととのえた。それから、ふり向き、身をよじって自分の姿を眺め、姿勢をしゃんとし、洋服のそここ、といっても、洋服の中で、少なくとも専門家の見るかぎり、居丈高な華やかさが、思いつきふくれあがらせている部分についた刺繍の糸を何本か取りのけた。その瞬間、彼女の最も不快な思いといえは、糸を取り除くのを口実に、視覚をたっぷり働かせたその箇所、何本か指を働かせて、触覚

をおそろおそろ使わなければいけないということで、それがいやでいやでならなかった。

世紀を経て、黄色い傷に、しみがいくつもついたその鏡から、ゾライデの女性像が、派手好みの小説なみに、光り輝いていた。ダヌツィオの垂流なら、遅ればせながらも、じっと坐ったまま、それを相手に長々と、傑作な談議をものすることだろう。

事実、身なりをととのえているその間に、自分の身体が上品で、わざとらしくもあれば、つとめて平静にみえるよう心がけてもいたが——彼女は刺繍をしながら、軽く一息ついて、その平静さにおのれをゆだねるのであった——古代ギリシャの武装兵をもぞっとさせるような、肉体的傲慢さといった趣きを呈するまでに変っていった。

かかとは締めつけてあり、筋ばった足首につづくのが、靴下を上手にはいた左右対称の両脚で、痙攣するたびに、愛の営みを助けるたびに、賢明な筋肉がその両脚を生き生きとさせるのであった。それに短いスカートをはいていたが、短いのは貧困のせいで、流行によるものではない。で、スカートの中身も秘密というわけにはいかなかった。それは存在の生き生きした主張をおっしゃるとおりと納得したうえで、悦楽が頭をもたげるまでは、じっと押えておこうというのだ。ミルクと琥珀の色あいに光り輝き、神秘的に柔らかなものと考えられていて、秘められた好色と老練な画才をもってすれば、触覚によってそれを知り、それをひ

んむくばかりにして、芸術の力で表現することができよう。もみの林から、大理石の柱の間から、夕べの吐息とともに現れた総督の緋衣と黄金の豪勢さ。

服を留めてあるのは、長い布を縫いあわせたベルトではなくて、マントと同じで、背中と威勢のよい乳房のおかげで留まっていたのであり、乳房が果して肉なのか、何か物体なのか判断がつかなかった。そして、両腕をさし上げているため、短い袖の中から腋の下がのぞいていた。左腕は、黄褐色で黄金色のたわわな髪を支えようと、やつのことで持ち上げていて、右腕は大きな櫛を持っていたが、この方は、もてあそばれてうんざりだというように、おとなしく手の中におさまっていた。腋毛はデリケートな絹を思わすブロードで、わざといたずらでもしたのか、これ見よがしにデリケートにカールしてあった。だが、誰に見せようというのか。

そして、唇は形スタイルの面ではかとは対照的にふくれあがって、ちよっぴり哀れをさそい、その下のおごは、少々、ゆがんでいる——この華やかな顔からは、虹彩が金色と灰色を帯びて、意地悪くも沈黙した静かな、真剣な視線が二本、鏡の中に射こまれていた。それをうけて鏡の方は、ゾラの方法論（自然主義文
学の方法論）の発作にかられて、細かい分析係よろしく、切れ長の目に愛の影を宿した手固い写真家よろしく、きびしく反射しつづけていた。これで相手が男性な

ら、おそらくは二十世紀ふうの人間だということだけで、写真は無残なまでに写実的なもので終っただろう。ところが、櫛を持った女となると、話はちがって、これはひねってとらなければならない。というのも、まっとうな女性相手では何もやりようがないからだ。

ゾライデはついにドアを開けると、思いきってテラスに出た。脇の方と正面のテラスには生あたたかい陽射しを浴びてすでに十七人の女たちがそれぞれの用で姿を見せていた。手すりにもたれるもの、入るのか出るのか、戸口に立っているもの、柄のこわれた錆びたナイフを持って、レタスカカーネーション用のだろう、花びんか壺の中をかきまわしているもの。これはあとになって水をあけて、それできりをつけるつもりなのだ。

たしかに自分たちの仕事にふけていた。何羽かの悲しいカナリヤがいて、ねちっとしたいたずらっ子が何人かいる。そして、あの特別な信号で、人の来るのが分かる娘たち。この信号はゾライデの中にもあって、鋭敏であり、反応が迅速で、れっきとした作家なら「女の本能」とでも呼びたいところだろう。

「なんの用なの。とにかく、こんどは覚えておいてよ、あたしはつんぼじゃないんですからね」と、あいさつはそっちのけにしてジルドにいった。そして、唇を結び、白い額に突然、まっすぐに縦皺を一本きき込んで、きびしく彼をにらみつけた。いかにも手持ちぶさただとい

うように、首に下げた貧弱な銀の鎖を両手に巻きこむと、いまにもこわれそうな十字架もその中にいっしょくたにした。おかげで、両腕の前の方と肘が乳房を守るかっこうになった。

「分かったよ、分かった」と青ざめた顔で、びくつとふるえるようにジルドはいい、唾をのみこんだが、ノックをしてからドアが開くのをみるまでの長い合間に、その唾を分泌しながら、彼の耳下腺はたっぷり作業にいそしんだのである。笑顔のようなものを作って、口を半分すぼめ、両の拳をポケットに入れ、片脚に重心を置いて、そっくりかえり、別の脚は屈託のないふりをみせようと、ぶらぶらさせていた。

これはゾライデの夫のいとこで、戸籍上はベッシーナ・スバルターコ・ディ・エルメネジルド、世間ではジルド、通称エル・カステーニャだった。

それというのも、一度ならず起ったことだが、彼が女たち、なかには出稼ぎの女たちもいたが、そういう女たちといっしょにいて、ライバルや保護者や、あるいは亭主などの手でその現場を押えられたところから来ている。そして、ついには、税務署、憲兵、特捜隊まで彼らなりの“やぼ用に巻きこまれ、それがいまでは数カ月もつづいていた。この三者のうち特捜隊は結局、彼を混乱させ、あきらめさせることにした。で、計りごとをめぐらしたのだが、そのことでカノーニカやバオロ・サルピの一带に、およそ何人も考え及ばないような